

開会挨拶

田中 直毅 (21世紀政策研究所 理事長)

最近、ゲノムの解明にかかわる分野で驚いたことがあります。それは、今から 10 年以上前、遺伝子情報の解読にかかわる仕事を、スーパーコンピューターその他を使ってやりたいと言い出した人に対して、NIH¹が研究資金をつけなかったという話です。

NIH という組織は、日本のお手本みたいに私は考えていました、せめて日本におけるサイエンスの分野の資金配分が NIH 並みになれば相当変わるだろうと思っていますし、事実、日本に比べれば相当すぐれた実績があると思います。しかしその NIH でも新しい分野のことに研究資金がつかなかった。NIH を飛び出た人の話を読みますと、「なぜお金がつかないと思ったか。それは、非常に影響力のある某氏が、こういうやり方はだめだと言ったからだ。そこで外に出た」と書いてあります。



それから先が大変アメリカ的なのですが、大工場みたいなものをつくって、その中で一つ一つ解読が始まるわけですが、ある NPO が、ハイリスク・ハイリターンだから投資するというのではなく、サイエンスのためにギフトとしてお金を出した。それも日本円にして 400 億円ぐらいのようですが、それを評価するノンプロフィットの仕組みがあって、ノンプロフィットで 400 億円のお金が出ている。その後、プライベートカンパニーになったように見えますけれども、それ以前に、行きっきりのお金が出たというのは、これはやっぱり衝撃です。

日本で、行きっきりのお金で 400 億円とか 500 億円というのは、集められるでしょうか。しかもたった 1 つのプロジェクトではなくて、いろいろな面にお金が出ているわけです。この 10 年、日米格差をいろいろ感ずることはあるのですが、ひょっとしたら、このビハインドは回復がきかないかもしれないという意味で、私はちょっと衝撃を受けています。

NIH を模倣したからといってうまく行くわけではない。でも、模倣するまでも距離がある。しかし、その先はもっと距離があるというのは、つらい現実だなと思っています。

今回、いろいろな分野でお仕事をされている方から、日本の閉塞を打ち破るためにはどうすることが考えられるのか、いろいろお話を承ることができると考えております。どうぞ忌憚ない意見を述べていただき、あるいは、きょうのミーティングが終わった後も、私どもの担当者のほうに助言と、あるいはさらにご提言をお寄せいただければと思います。

¹ National Institute of Health。ワシントン D.C.にある米国最大の国立研究所で全米の医療関係の研究・開発予算のFunding agencyでもある。年間予算 230 億ドルでその 10%を約 5000 人の内部研究者に対して拠出している。